Check Point 4 コストは？

手続・手数料

このページでは、購入・換金時の手続きや手数料・税金などについて確認できます。

お申込みメモ

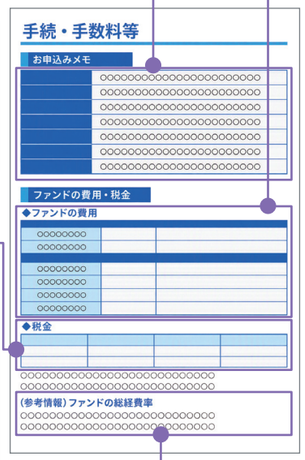
実際にいくらから買えるのか、あるいはいくらから換金できるのかを、購入（換金）単位や購入（換金）価額で確認しましょう。信託期間や繰上償還の条件も合わせてチェックしましょう。

税 金

分配金と換金（解約）時・償還時の差益に対して、所得税・地方税などがかかります。NISA（少額投資非課税制度）やこどもNISA（2027年1月開始）を利用すると、非課税の優遇を無期限で受けることができます。

（参考情報）ファンドの総経費率

運用管理費用やその他の手数料など投資信託にかかる全ての費用を合計し、年率で表したもの。全体でのコスト負担がどれくらいなのかわかりやすくなっています。



ファンドの費用

投資信託にかかる3つの費用を確認しましょう。

購入時手数料

購入時に販売会社に対して支払う手数料です。同じファンドでも販売会社によって手数料が異なる場合もあります。購入時に手数料を取らないノーロードファンドもあります。

信託財産留保額

中途解約のペナルティ的な意味合いで、一般的に換金時に負担し、ファンドの中に留保されます。信託財産留保額がかからないファンドもあります。

運用管理費用（信託報酬）

運用や管理の費用として、ファンドの残高から差し引かれる手数料です。ファンドを運用する会社、ファンドを販売する会社、資産を管理する信託銀行で分け合います。

読み方ポイント　運用成果に大きく影響する「運用管理費用」に注目しましょう。

中長期で投資をするのなら、最初に一度だけかかる購入時手数料よりも、保有期間中ずっとかかり続ける運用管理費用（信託報酬）に注目しましょう。一般的に、リサーチなどのコストがかかるアクティブファンドは、機械的な運用を行うインデックスファンドに比べて運用管理費用が高くなります。また、アクティブファンドの中でも、新興国に投資するファンドはコストが高めの傾向があります。

手数料が安ければいいというものでもありませんが、投資対象が同じで、実績も同様のファンドであれば、低コストのものを選んだほうが、実質的なリターンは高くなります。



知っ得ポイント 分配金

定期的に支払われる分配金は、投資信託の大きな魅力といえるでしょう。ただし、分配金は基本的に配当・利子収入と売買益などを原資としているため、本来、一定の額にはなりません。ところが、投資家が安定的かつ高い分配金を望むことから、ファンドによっては一定の額の分配金を支払い続けているケースも見受けられます。どんなに高い分配金を出していても、基準価額が下がり続けているようでは良いファンドとはいえません。投資信託のリターンは、あくまで基準価額と受け取った分配金の合計額で考えるべきでしょう。



IMAJ 資産運用業協会
資産運用業協会　検 索

投資信託のすべてが見えてくる

なるほど!!

交付目論見書（こうふもくろみしょ）

投資信託説明書

Check Point 1 何で運用？

Check Point 2 リスクは？

Check Point 3 実績は？

Check Point 4 コストは？

投資信託のポイントがわかる「投資信託説明書」を活用しましょう！

投資信託説明書（交付目論見書）は、投資信託を選ぶ際に知っておきたいポイントをわかりやすくまとめた資料です。商品の特徴やリスク、費用などを確認でき、自分に合った投資信託選びに役立ちます。

高山 一恵（たかやま かずえ） 先生
ナビゲーター
ファイナンシャルプランナー

CFP®、1級ファイナンシャル・プランニング技能士。資産形成やライフプランニングをテーマに、講演・執筆・相談業務を行う。テレビ・ラジオなどのメディア出演や金融教育コンテンツの発信にも携わり、幅広い世代に向けてお金の知識をわかりやすく伝えている。



資産運用業協会

投資信託説明書（交付目論見書）をしっかり確認・理解しましょう!

投資信託説明書は、投資信託に関する重要な情報を投資家に伝えるために電子交付される書面です。投資信託を購入する際は、必ず内容を確認しましょう。

1 ファンドの目的・特色
2 投資リスク
3 運用実績
4 手続・手数料

投資信託説明書って なに？

【交付目論見書と請求目論見書】

目論見書（投資信託説明書）には、交付目論見書と請求目論見書の2種類があります。交付目論見書はファンドの基本的な情報が記載されているもので、投資信託を購入する際に投資家に必ず交付されるものです。一方、請求目論見書は、より詳細な情報が記載されているもので、投資家から請求があった場合に交付されるものです。交付目論見書も請求目論見書もWEB上で確認できます。

Check Point 1

何で運用？

ファンドの目的・特色

このページでは、投資信託の「基本的な性格」を確認できます。

ファンドの目的

何を目指す？

ファンドがどんな資産に投資するのか、値上がり益による「成長」を重視するのか配当･利子収入による「安定した収益」を重視するのか、また市場への連動を目指すか否かなど、ファンドの骨格を理解しましょう。

ファンドの特色

どこに投資？

投資対象となるエリアが「国内」「海外」「国内外」のいずれかをチェック。海外の場合は、「先進国」か「新興国」かも合わせて確認します。

何に投資？

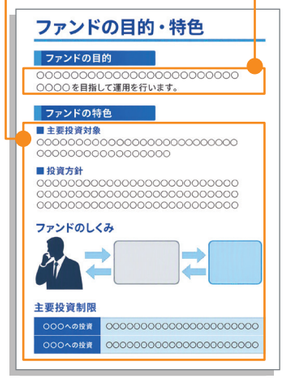
収益を生む資産については入念なチェックを。主な資産の種類として、債券･株式･不動産投信(リート)、コモディティ（商品）などがあり、複数の資産に投資するタイプもあります。

ファンドの仕組みは？

株や債券などに直接投資するタイプのほか、ベビーファンドが集めた資金を、マザーファンドを通じて投資する「ファミリーファンド方式」も多くなっています。また、複数の投資信託に投資する「ファンド･オブ･ファンズ」もあります。

分配の方針は？

分配の頻度(毎月、隔月、四半期、半年、1年など)や分配金額に対する考え方もおさえておきましょう。同じファンドで分配頻度を選べるものもあります。



読み方ポイント　ここに注目！投資信託選び3つのポイント

Check! 1 どのエリアに投資するか

一般的に、国内に投資するより海外に投資するほうが、為替変動リスク(「2リスクは？」参照)があるぶん値動きの要因が複雑になります。また、同じ種類の資産であれば、先進国より新興国に投資するほうが、リスク･リターンは大きくなります。1国に集中投資するより、複数の国やエリアに分散するほうが、相対的にリスクを抑えることができるでしょう。

Check! 2 何に投資するか

長期で安定した運用を望むなら債券のウエイトが大きいファンド、値上がり益を追求するなら株式の割合が多いものを選ぶのがコツ。リスクの特性がこれらと異なるリートやコモディティ（商品）を組み合わせた分散投資も、一つの方法です。

Check! 3 インデックスかアクティブか

投資信託には、市場の値動きへの連動を目指す「インデックスファンド」と、ベンチマークを上回る成果を目指して独自に運用する「アクティブファンド」があります。代表的な指標としては、国内株式なら日経平均株価やTOPIX、外国株式ならMSCIコクサイやS&P500などがあげられます。



Check Point 2

リスクは？

投資リスク

このページでは、基準価額の変動に影響を与える「リスク」について確認できます。

投資信託は、それぞれリスクが異なります。どのようなリスクがあるのか、しっかり確認しておきましょう。

価格変動リスク

組み入れている株式や債券などの価格が変動するリスク。景気の動向や発行企業の業績などの影響を受けます。

為替変動リスク

為替レートが変動するリスク。外国の資産で運用するファンドでは、一般的に円高になると基準価額にマイナス、円安になるとプラスの影響があります。



代表的な資産クラスとの騰落率の比較等

右は、一番左に当該ファンド、その右に代表的な資産（国内、先進国、新興国の株式、債券など）が並び、過去5年間（60ヵ月）の「年間騰落率」の平均値、最大値、最小値を表しています。棒グラフの長さや平均値などを勘案して見ることができます。





左の棒グラフは、そのファンドの各月末における「年間騰落率」を、過去5年間（60ヵ月）表しています。

読み方ポイント　投資家の「好み」と「資金の余裕度」に応じてリスク許容度が変わります。

金融の世界では、「リスクこそがリターンの源泉」という考え方をします。ブランコを空高く漕ぐためには後ろにも大きく下がることが必要なように、高い収益を期待するなら、ある程度大きなリスクを引き受ける覚悟が必要です。

ただし、リスクを引き受ける力は、投資家のリスクに対する好み以外に、年齢や資産･収入などで変わってきます。若い世代でこれから働いて稼げる人や余裕資産が多い場合は「リスク許容度」が高く、株式などを中心に積極運用することが可能ですが、年金生活者や収入が不安定なケースでは債券を中心に運用するなど安定的な運用を心掛けたほうが良いでしょう。



Check Point 3

実績は？

運用実績

このページでは、「運用実績」をグラフなどで確認できます。
（新しい投資信託では、ファンドの運用実績はありません。）

基準価額・純資産の推移

投資信託の時価である基準価額は、その水準がいくらかということよりも、値動きの大きさやトレンドを確認することが大切です。投資信託の規模を表す純資産総額は、小さすぎると途中で繰上償還の可能性があるので、順調に増えているものが望ましいでしょう。

主要な資産の状況

投資している資産や通貨の比率、大きなウエイトを占める銘柄などを確認しましょう。割合の大きな資産や通貨を見ることで、そのファンドが有するリスクを推測できます。



分配の推移

運用収益の一部を決算ごとに投資家に還元する分配金は、配当･利子収入と売買益が原資と なります。そこで、そのファンドがどのように分配を出してきたかをチェック。ただし、分配金が高ければいいというものでもないので注意が必要です。(「知っ得ポイント」参照)

年間収益率の推移

年間収益率は、ファンドの価値が1年間にどれくらい上下したかを表したもので、ファンドの値動きの幅などを視覚的に確認することができるでしょう。

読み方ポイント　運用の上手さを見極めるには、基準価額とベンチマークの関係に注目!

投資信託の時価である基準価額は一般的に1万円からスタートしますが、分配金を出せばそのぶん基準価額は下がるので、一概に高ければいいというものではありません。反対に、同じ種類の投資信託なら基準価額が低いほうが割安というのも誤った認識です。

ベンチマーク（目標とする指標）があるファンドの場合は、基準価額はベンチマークとの関係で見るのがポイント。アクティブファンドで、ベンチマークとなる指標に負け続けていないか、インデックスファンドなら指標にぴったり連動しているかをチェックします。

ベンチマークがあるファンドなら、過去のデータを参考にすることで、そのファンドの運用の上手さを推測することも可能です。ただし、実績はあくまで過去のもの。将来の投資成果を保証するものではありません。